

クリニカル・クエスチョンで考える 外傷整形外科ケーススタディ

土田芳彦・編

評者 最上敦彦

(順天堂大学静岡病院前任准教授・整形外科学)

B5判・368頁
2024年3月
定価：11,000円
(本体10,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-05321-1
医学書院 刊



編者の土田芳彦先生は、小生の旧来の友人であり、ともに還暦を過ぎた同級生であり、そしてともに外傷整形外科の分野で戦ってきた戦友である。「土田芳彦」といえば、言わずと知れた日本を代表する外傷整形外科医である。とりわけマイクロサージェリーを駆使した重度四肢外傷治療の先駆者で、その知的戦略は『重度四肢外傷の標準的治療—Japan Strategy』(南江堂)として2017年に出版され、今や日本の重度四肢外傷治療のバイブルとして多くの外傷整形外科医の手元に置かれていることであろう。

今回、この重度四肢外傷とは別に、一般整形外科外傷を対象にした本書『クリニカル・クエスチョンで考える外傷整形外科ケーススタディ』が刊行された。本書は新型コロナウイルス感染症が広がる2022年初頭の3ヶ月間、土田先生のコーディネートで開催されたwebセミナー「症例と文献に学ぶ外傷整形外科」の内容を基に構成されている。上・下肢全般52項目にわたる外傷を、4人の新進気鋭の整形外科外傷医 佐藤和生先生、佐藤亮先生、高田大輔先生、伊澤雄太先生が分担執筆している。いずれも土田先生がセンター長を務める湘南鎌倉総合病院・札幌東徳洲会病院の外傷センターで直接指導を受けた、まさに「愛弟子」である。

本書では、まず代表的症例が提示され、次いでその症例に応じた臨床的疑問(Clinical Question)が列挙され、執筆者はこれに対する文献的考察(Evidence)から読み解いた治療戦略を解説する。

最後に臨床家(土田先生)の視点から文献と実践との溝を埋めるような内容を加えることで、必要なスキルを各ケースから手に入れられる構成となっている。随所に散りばめられたコラム(T's Column)には、土田先生の本音が見え隠れして一興である。

ちなみに本書の元ネタとなるwebセミナー「症例と文献に学ぶ外傷整形外科」は、土田先生が主催するホームページ「湘南・札幌外傷整形外科研究所」(<http://sotc.kenkyuukai.jp/>、または「湘南・札幌外傷整形外科研究所」で検索)にアーカイブ動画が収録されている(http://syoreitobunkennimanabu.kenkyuukai.jp/member/society_entry.asp)。試しに本書を開きながら、アーカイブ動画を見てみた。すると、テキストを手にもweb講義を視聴している気分になると同時に、本文には収まりきらない情報や土田先生と演者のやり取りの中に考えるヒントが隠れていて、極めて有効な利用法と思われた。読者の皆さんもぜひ試してみてください。

本書に取り上げられた整形外科外傷はいずれも一般整形外科医が日々の診療で遭遇する頻度の高い外傷であり、本書の内容はこれを治療する医師にとって必須の知識である。日本の整形外科手術の約半分を整形外科外傷が占めると言われて久しい。よって、本書が出版された以上、もはや「知らぬ存ぜぬ」は通用しない。本書を熟読し、これからの診療に臨むことが、日本の整形外科医に求められている。